紀　　要

第　21　号

2008. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

特別史跡彦根城跡出土の湖東焼について

木　下　義　信

１．はじめに

湖東焼は、江戸時代の末期、彦根藩で生まれた主に磁器を中心とする焼き物である。

当初は焼き物市場に目を付けた彦根藩在住の古着商絹屋半兵衛の手で始められ、主に一般庶民への日常品生産を目的としていたが、その後彦根藩の召し上げとなり、藩窯として贈答用の高級品を焼成し、特に井伊直弼の時代には黄金期と呼ばれるほどに、秀逸な製品が数多く焼かれ、その知名度を高めていくこととなった。ところが、万延元年、桜田門外の変にて直弼が倒れると、急速に衰退し、窯場は民間へと払い下げがなされたのである。

民窯絹屋窯から藩窯、そして再び民窯と経営主体が変遷していく中で、現在一般的に湖東焼と呼ばれるのは、絹屋窯から藩窯期の江戸時代のものであることが多い。それは湖東焼の高級品志向の産物としての存在感が、その美術的価値を高めているからに他ならない。よって、江戸期の湖東焼は明治期以降のものとは一線を画すのが一般的な考え方である。

本稿では、この江戸時代の湖東焼を対象にし、近年発掘調査で徐々に増えつつある考古資料としての湖東焼を集成、整理することにより、今後の湖東焼研究について考古という側面から展開するための一稿としたい。

２．湖東焼の歴史

それでは、湖東焼がどのような盛衰の歴史をたどってきたのかを簡単に紹介しておきたい。

（１）民窯絹屋窯時代（文政12年（1829）～）

湖東焼は、彦根城下の古着商絹屋半兵衛によって開窯された。京都での古着の仕入れを行う傍らに見た、京焼の影響を受けたことが契機であったといわれている。当初は有田の職人を雇い、窯場を芹川右岸の晒山、その後佐和山山麓の餅木谷に築いたという。

素地には主に肥後産の天草陶石、呉須には当初は唐呉須、後には安価な美濃呉須を用いるようになったとされている。

日常品、高級品の両市場を見据えて焼成が行われたが、伊万里、瀬戸製の磁器が市場を占有する中で、この時期の湖東焼の知名度は当然ながら低い。むしろ、湖東銘が無いほうが作品そのものの価値が評価されるということで、上質の製品でも銘の入っていないものが多いことが想定されている。

絹屋窯は日常品、高級品の両市場にて競争に打ち勝つことができず、その後藩からの二度にわたる金貸与ののち、天保13年、窯場の藩への召し上げがなされた。

（２）藩窯時代（天保13年（1842）～）

彦根藩第一二代藩主井伊直亮の時代に、藩窯として生まれ変わることとなった。

直亮は道具好きで知られており、長崎に入る舶載品は「彦根様か薩摩様のお目にかけよ。」と言われたほどであった。

藩窯となった直後、各地の名工が多数窯場に招かれた一方で、窯の改築が進められた。原料は、絹屋窯と同様のものが使用された。

彦根藩は、京都守護職という特殊な立場上、多くの大名や朝廷との交際も盛んであったと考えられる。そういった側面からも、この時期から高級品の製作が盛んになったことが理解できる。

湖東焼の高級品志向にさらに拍車がかかったのは、次の一三代藩主井伊直弼の時代からである。徹底した高級化が図られ、上質の唐呉須を本格的に用いられたのもこのころからである。日常品市場を伊万里、瀬戸に抑えられている状況の中で、高級品としての湖東焼の流通に力をいれた。高級品としてのイメージ定着のためか、直弼初期段階の湖東焼には必ず湖東銘を入れさせたとされている。

窯の増改築も頻繁に行われた。湖東焼が高級品として定着してきた中で、さらに日常品生産へも目が向けられることとなり、江戸、大坂に向けての出荷もなされた。窯の増改築もそのような志向によるものである。

しかし黄金時代は、万延元年、桜田門外にて直弼が暗殺されたことにより、ほどなく終焉を迎えた。

（３）万延元年（1860）以降

直弼暗殺以降、湖東焼は急激に衰退していくこととなる。藩は、その後の内外の諸事情から湖東焼経営から撤退し、窯場を民間へ払い下げることとした。

再び民窯として存続することになった湖東焼ではあったが、藩という大きな経営主体を失った影響はいうまでもなく甚大である。一番の魅力とされた高級品志向は消失し、日常品が重点的に焼成されることとなった。湖東焼に携わった多くの職人は離散し、窯場の払い下げを受けた山口喜平の死をもって、湖東焼は廃絶することとなった。

開窯から廃窯までの期間はわずか六十年余り、黄金期と呼ばれた直弼時代に限ってはわずか十年という短命の焼き物であったのである。

３．湖東焼研究について

（１）これまでの主な研究

湖東焼についての研究は、大正期に北村壽四郎氏がその成果を結晶させて以来、その内容が一般論として広く浸透している。北村氏の研究は、戦時中に焼失し、今日残存していない文献であったり、実際焼成に携わった人物からの聞き取り調査を行ったりしているなど、現在では検証不可能となってしまったものを媒体としているため、湖東焼研究には不可欠な要素である。

研究は細部にまで至っており、湖東焼に関わる職人の出自、窯構造、規模の時系列的な変遷、使用した材料の調合、産地の把握など、その成果は多大である[1]。また湖東焼の特色として、釉薬がほのかに青く発色する点、藩窯期の高級品の染付には主に上質の唐呉須を使用しているため、その絵柄が鮮やかな青として発色する点などを紹介したことは、今日でも江戸時代、日常品磁器市場を席捲していた伊万里、瀬戸製品と、上物の湖東焼を区分する特徴として認知されている。

その後、谷口徹氏により、湖東焼に対し、モノそのものだけでなく、窯場経営という側面からのアプローチがなされている。これまでは湖東焼の藩への召し上げは、藩主の焼き物への興味という点で理解された面があったが、そうではなく藩の殖産興業政策の一環として磁器市場への参入を強く意識した焼き物である、という一面からの研究が進められている[2]。

（２）湖東焼の特色

湖東焼の特色については、前述の通り、北村氏の見解が広く知れ渡っているところである。

その一方で小倉栄一郎氏は、湖東焼の釉薬がほのかに青く発色する点について、北村氏の言う原料となる物生山石こそが原因であるという見解に批判を行っている[3]。

釉薬が青く発色する点は、何も湖東焼に限ったことではなく、伊万里焼等でも観察できる。藩窯期に彦根藩のお抱えとなった、後の京焼の大家、幹山伝七は藩窯の終焉ののち、京都に移り彦根時代と同様の調合法で磁器を焼成したところ、湖東焼のようなほのかな青味が出なかったという。明治期の民窯でも物生山石を原料としたが、同様の結果だったといわれている。

この矛盾に対して小倉氏は経験と研究の過程から、「ごく微量の鉄分を含む釉薬と、還元焼成が原因である。」[4]という見解を示した。北村氏の論考に対し、科学的根拠から批判し、その特色が湖東焼だけに限られるものではないと再考を行った格好である。

一方の特色である、呉須の鮮やかな発色という点についても考察を述べておきたい。

湖東焼は藩窯期には高級品としてのブランド力を持っていただけに、その原料にも多くのこだわりが見て取れる。その一つが、絵付に使用される上質の唐呉須である。

井伊直弼の時代になると、本格的に上質な唐呉須の使用がはじまったとされている。唐呉須で描かれた絵付と、伊万里、瀬戸で大量生産体制の中で描かれたそれを比較してみると、両者の違いは明らかである。伊万里、瀬戸に比べて湖東焼の染付は鮮やかな発色をしている。

ところが明治期に入ると、ドイツ人ワグネルによって教授された人工コバルトの製法が各地に広がっていく。これならば安価ながらも、絵柄は鮮やかな青を発色し、湖東焼の特色とされてきた上質の唐呉須とも遜色ない。事実、明治期以降、人工コバルトが普及した伊万里、瀬戸製の磁器の絵柄は非常に鮮やかな青が発色している。

つまり、上質の唐呉須を用いた湖東焼と、人工コバルトを用いた磁器は、呉須の発色で明確な判別は困難なのである。

（３）考古資料としての湖東焼

その他にも、多くの写し、多くの贋作の存在が想定される中で、モノ自体を観察するのみでは湖東焼を判断するには困難である。では江戸期の湖東焼をいかに判別したらよいだろうか。

ここで、考古学的見地からの検討をすべきではないかと考える。近年、特別史跡彦根城内などでの発掘調査が進み、湖東焼の出土事例が徐々にではあるが増えている。これらは調査成果から江戸時代の遺跡より出土していることで、殖産興業策の一環であり、高級品志向の産物であった、俗に言う江戸時代の湖東焼であると言える。湖東焼には前述した以外にも、伝世品を通して見える特色が認知されているが、それらの特色を満たし、且つ江戸時代の遺構より出土した湖東焼こそが我々が求めるものなのである。

湖東焼についての研究は、今日まで残る名高い江戸期の伝世品と、この考古資料としての湖東焼を包括的に考察してこそのものであろうと考える。

４．特別史跡彦根城跡出土の湖東焼

（１）彦根城内の主な調査事例

湖東焼の出土遺跡は、佐和山山麓に所在する餅木谷の湖東焼窯場を除くと、滋賀県内では彦根城内に限られている。

現在までに彦根城内では、数次の発掘調査が行われているが、その調査対象地は彦根城を構成する四つの郭の内、天守を中心とする第一郭と、家老以下一千石前後の藩の上級武士の邸宅地が立ち並ぶ第二郭での調査が中心となっている。

調査では江戸時代の遺構が多く検出されている。つまりこれら調査の中で出土する湖東焼は、遺構や供伴遺物から判断し、江戸時代ものと考えてよいだろう。江戸時代の遺跡から出土する湖東焼を対象とし、追って紹介していきたい。

まずは特別史跡彦根城跡での調査履歴を確認していくこととする。以下、彦根城内の主要な調査を列挙する。図１、２は調査地の位置を地図上で示している。なお、調査

地については、遺跡の名称が「特別史跡彦根城跡」として包括されているため、調査対象地となった地点名で示すこととする。

①県立彦根東高等学校内１次調査（昭和55年度）[5]

現在の県立彦根東高等学校内で行われた調査である。当該地周辺は、彦根藩の重臣の邸宅地が立ち並ぶ一角であることが、天保７年（1836）作成の『御城下惣絵図』などからわかっている。

調査では江戸時代の建物跡二棟や溝に加え、池や井戸など庭跡が推測できる痕跡が認められ、当時の武士の生活空間を想起させる遺構が多く検出されている。

絵図によると、当該地は江戸時代後期、長野伊豆邸と広瀬美濃邸であったことが分かり、検出された溝は両邸を分割する区画溝の役割を果たすものと考えられる。

出土遺物は江戸時代後期から末期に帰属するものが大半で、肥前、瀬戸製の陶磁器を中心に、器種組成も日常品をはじめとして多岐にわたっている。

湖東焼は、破片などを含めると数十点が出土しており、現在までの成果では最も多い出土例となっている。

当該地が邸宅地と推測された長野伊豆は、藩窯時代に家老職であった人物であり、湖東焼の経営に対して少なからず携わっていたようである[6]。そのことが湖東焼の出土量が多いことにも影響している可能性がある。

②表御殿跡調査（昭和58、59年度）[7]

現在の彦根城博物館の所在地点で行われた調査である。表御殿は、藩主の居住空間である一方で、政務を執り行う場であった。

調査の結果、表御殿は建物の増改築が度々行われていることが確認でき、御殿を構成する建物をはじめとする遺構が数多く検出されている。能舞台にて音響効果を高めるための漆喰枡や、庭園遺構が非常に良好な形で検出され、まさに彦根城の中枢にふさわしい成果があがっている。

出土遺物も大量に出土しているが、その一方で、表御殿が建設後から明治期の解体に至るまで、大規模な災害を受けることがなかったため、江戸期の中でも古い時代のものより、比較的新しい時代のものが残存しており、出土遺物の大半を占めている。

中でも湖東焼は江戸後期から明治期にわたるものが出土している。

③彦根市立彦根西中学校内調査（昭和60年度）[8]

現在の彦根市立彦根西中学校内にて行われた調査である。

絵図によると、江戸後期から末期にかけて、印具、吉田氏など複数の武家の邸宅地となっていたと描かれている地点である。

建物跡が複数検出されていることに加え、雨落ち溝が見つかっており、これが絵図に見られる各邸宅地の境界とほぼ一致するという報告がなされている。また、表御殿と同様漆喰池が検出され、当時の上級武家の生活の一端が垣間見られる。

全般的に出土品は非常に少なかったと報告されているが、湖東焼の出土もなかったようである。

④県立彦根東高等学校内２次調査（昭和61年度）[9]

県立彦根東高等学校で行われた二度目の調査である。絵図から、第１次調査で検出された長野邸と、隣接する西山邸のほぼ境界付近であることが想定された。

検出された遺構は、溝や廃棄土坑などで建物遺構は確認されなかった。

その廃棄土坑より、大量の遺物が出土している。大半が、肥前系の磁器で占められており、それ以外にも十箇所を超える産地の製品の出土が報告されており、その器種も多様である。遺物の大半が江戸時代中期の年代観が与えられるが、後期の遺物も少なからず出土している。

隣接する第１次調査地点では湖東焼の出土が多くみられたのに対し、この地点での全く出土はみられない。出土がみられない理由として、出土遺物の多くが、湖東焼が存在しない江戸中期に帰属することで、年代観の違うことや、隣接する長野邸との性格的差異などが推測されている。

⑤米蔵・水門・作事所跡調査（平成12、13年度）[10]

今回紹介している彦根城内跡で、米蔵が想定されている地点が唯一、第一郭内に調査が及んでいる。

調査では、米蔵会所跡と推測される礎石列や、米蔵土塀の基礎などが確認されている。

遺物についての報告はなされていないが、湖東焼の出土がなかったことを、谷口徹氏よりうかがっている。

⑥県立彦根東高等学校内３次調査（平成19年度）

現在の県立彦根東高等学校で行われた三度目の調査である。彦根東高等学校内第２次調査に隣接する地点が対象地となった。絵図では、江戸時代後期には戸塚家の邸宅地であったと描かれている。

調査では江戸時代後期の二棟の建物、それに伴う雨落ち溝、廃棄土坑が検出され、これらは戸塚邸の一端を成すものであると推測される。また、江戸時代前期の礎石跡、溝跡が確認でき、これらが彦根城築城当時の居住空間であった可能性が推測されている。

保存を前提とした調査であったため、遺構の完掘を行うことはなかったが、遺物の出土も多く見られている。中でも大半が肥前、瀬戸製の陶磁器によって占められており、それらは主に江戸時代後期から末期にかけての時期が与えられる。

一方で、江戸時代後期の廃棄土坑などから湖東焼の出土も確認している。

（２）出土湖東焼の概要

以上述べてきたとおり、彦根城内の調査で湖東焼の出土が確認できた事例は三件であった。本節では出土した湖東焼についての概要を述べることとしたい。

掲載資料は、図３～５に遺物実測図を、図６，７に印銘の詳細を示している[11]。遺物実測図に関しては、原則として、側面だけでなく内外面に絵柄等が描かれている場合は、その方向からの写真を掲載することとしている。また、今回掲載した資料の一覧は表１に示している。

遺物の主な概要については図版及び一覧表に譲ることとし、以下は一覧では表せなかった部分についての補足を述べていくこととしたい。

①県立彦根東高等学校内１次調査出土（資料番号１－１～１－32）

当該地では計32点の出土資料を掲載した。破片など、図化し得ない資料を含めると数十点以上の出土が確認されている。量が出ている分、その器種も多岐にわたっている。

１－１から１－９は煎茶碗である。

江戸時代中期、中国より煎茶がもたらされ、日本では特に文人達の交流の中でのたしなみの一つとして確立していった。彦根藩主井伊直弼もその影響を受けた一人であり、湖東焼でも多くの煎茶器が焼かれ、伝世品の優品の中でも煎茶器の占める割合が非常に多いとされている[12]。

今回掲載した資料でも、煎茶碗や急須など煎茶器の占める割合は、全体の四割近い数を示す。

中でも、１－５から７の三点の、赤絵金彩で彩られた煎茶碗は、伝世された優品と比較しても遜色ない様相を呈す。

１－21は一部分しか残っていないため、全容を想定することは困難であるが、注口部分であることが推測できる。赤絵金彩、絵柄、筆致の繊細さから湖東焼と判断した。

②表御殿跡出土（資料番号２－１～２－６）

当該地で現在確認されているのは今回掲載した計６点である。しかし、現在も整理調査段階であり、調査の規模、遺跡の性格から勘案しても、今後更なる出土例の増加が期待できる。

２－１、２はほぼ完形の急須である。湖東焼の急須にはいくつかの特徴がある。大胆な上げ底、「どべ」とよばれる製法で、底や蓋裏に作られる螺旋状の突起、そして素地が極端に薄手であることがそれに該当する。

今回掲載した急須は、他地点のものを含めても、この特徴をほぼ満たすものである。

③県立彦根東高等学校内３次調査出土（資料番号３－１～３－５）

前述のとおり、保存を前提とする調査であったことから遺構の完掘は行わなかったが、それでも計５点の出土がみられた。図化し得ない資料を含めると、数十点に及ぶ可能性が推測される。

３－３、４の急須は当該地で検出された江戸期の廃棄土坑と推測される遺構から出土している。

５．おわりに

本稿では特別史跡彦根城跡出土の湖東焼について、集成、整理を行った。これまで、考古資料という側面から湖東焼の研究が進んでこなかった状況の中で、今後の湖東焼研究展開のための契機となる基礎資料が提示できたのではないかと思う。

しかし、湖東焼の把握のためには考古資料だけでなく、伝世品を含めた広い視野での研究が不可欠となる。両者を包括的に考察することにより、はじめて江戸時代の湖東焼についての把握が進むものと考える。

今後、埋蔵文化財調査のみにあらず、伝世品の調査についても更なる成果があがることを期待し、本稿を終えることとしたい。

（きのした　よしのぶ：企画調査課）

謝辞

本稿の執筆に関して、表御殿跡出土資料調査において、彦根市教育委員会の谷口徹、林昭男両氏には多忙な中、多大なるご配慮を得ました。特に谷口氏には、本稿執筆にあたって、湖東焼について様々な面からのご教示を頂きました。

また白井弘幸氏には、資料撮影に関して多大なご協力と、技術面における多くのアドバイスを頂きました。

当協会の諸先輩方にも広くお世話になりました。畑中英二、辻川哲朗両氏からのご指導、三宅弘（滋賀県埋蔵文化財センター）、田井中洋介（安土城考古博物館）両氏には資料実見の面で、その他にも多くの方々のご協力があり稿を終えることができました。

末筆ながら、本稿に携わってくださった多くの方々に、記して厚く御礼申し上げます。

註

⑴　北村壽四郎『湖東焼の研究』湖東焼の研究出版後援会　1925

⑵　谷口徹「藩窯の経営と特色」『彦根城博物館研究紀要　第十三号』彦根城博物館　2002

⑶　小倉栄一郎『湖東焼―盛衰と美―』サンブライト出版　1985

⑷　前掲註⑶

⑸　横田洋三ほか『出土文化財資料化収納業務報告書Ⅱ－１』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2005

⑹　前掲註⑴

⑺　宮本長二郎、沢田正昭ほか『特別史跡彦根城跡　表御殿発掘調査報告書』彦根城博物館　1988

⑻　『特別史跡彦根城跡発掘調査報告書Ⅰ』彦根市教育委員会　1985

⑼　清水尚『特別史跡「彦根城」』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1986

⑽　『特別史跡彦根城跡（米蔵、水門及び作事所跡）発掘調査報告』彦根市教育委員会　2003

⑾　県立彦根東高等学校内第１次調査出土の掲載資料は、１－

８，10，12，14，18，22～24を除き、『出土文化財収納業務報告書Ⅱ－１』（横田ほか2005）に掲載されたものを、実測、撮影し直したものである。

⑿　『煎茶とやきもの』愛知県陶磁資料館2000年

参考文献

⑴　北村壽四郎『湖東焼の研究』湖東焼の研究出版後援会　1925

⑵　谷口徹「藩窯の経営と特色」『彦根城博物館研究紀要　第十三号』彦根城博物館　2002

・湖東焼復興推進協議会『幻の名窯　湖東焼』サンライズ印刷出版部　1996

⑶　小倉栄一郎『湖東焼―盛衰と美―』サンブライト出版　1985

⑷　山本勇三、加藤喜康『湖東焼私考』文芸社　2007

⑸　たねや美濠美術館『湖東焼　たねや美濠美術館図録』たねや近江文庫　2007

⑹　『柴田コレクション総目録』佐賀県立九州陶磁文化館　2003

⑺　『煎茶とやきもの』愛知県陶磁資料館　2000

⑻　『出土品にみる江戸時代の生活』滋賀県立近江風土記の丘資料館　1982

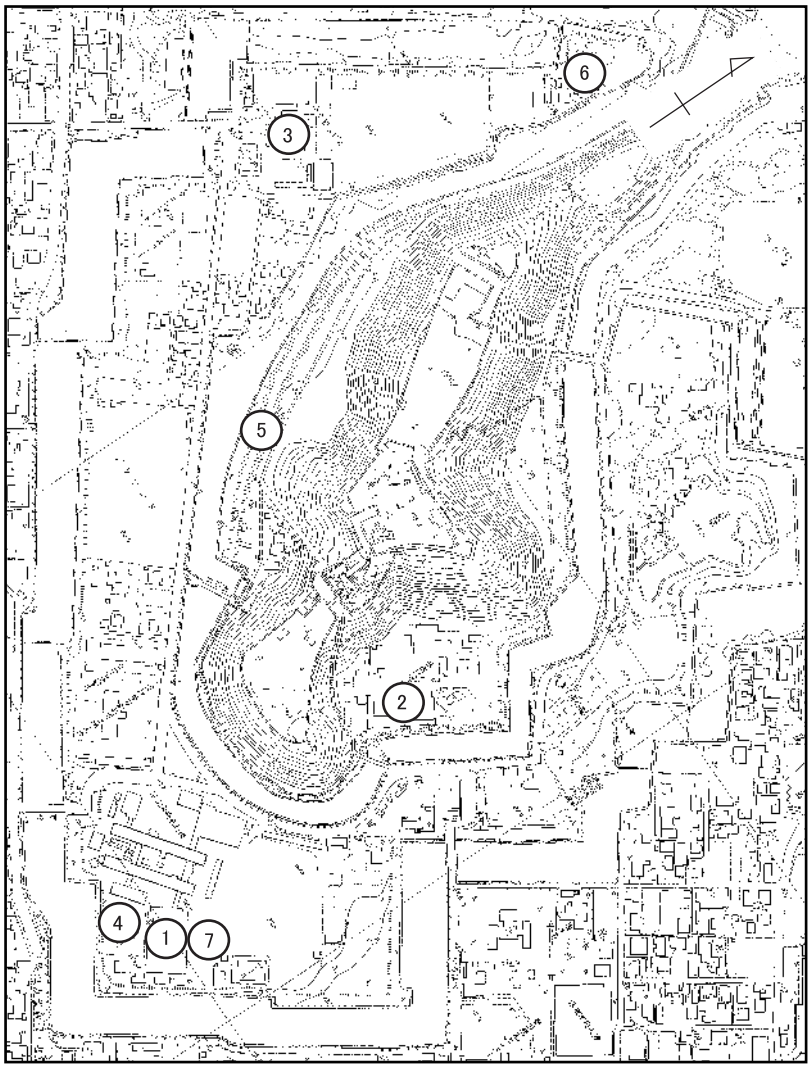
⑼　横田洋三ほか『出土文化財資料化収納業務報告書Ⅱ－１』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　2005

⑽　『特別史跡彦根城跡発掘調査報告書Ⅰ』彦根市教育委員会　1985

⑾　宮本長二郎・沢田正昭ほか『特別史跡彦根城跡　表御殿発掘調査報告書』彦根城博物館　1988

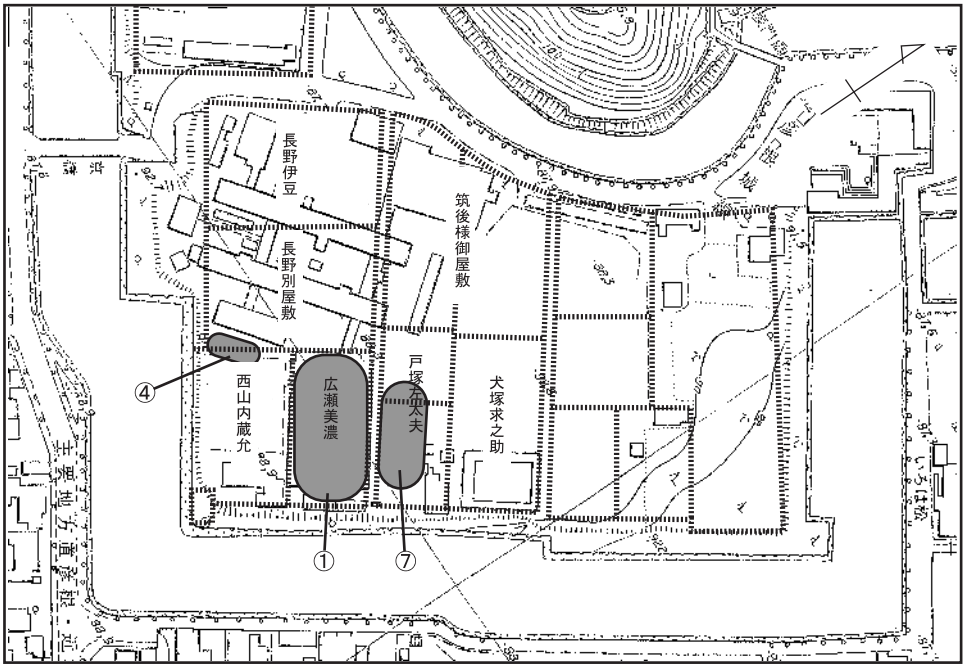
⑿　清水尚『特別史跡「彦根城」』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会　1986

⒀　『特別史跡彦根城跡（米蔵、水門及び作事所跡）発掘調査報告』彦根市教育委員会　2003



① 県立彦根東高等学校内第1次調査
② 表御殿跡
③ 彦根市立彦根西中学校内調査
④ 県立彦根東高等学校第2次調査
⑤ 米蔵会所、水門跡
⑥ 作事所跡
⑦ 県立彦根東高等学校内第3次調査

図１　特別史跡彦根城跡　発掘調査位置図



※破線は天保7年（1836）作成の、『御城下惣絵図』に基づいた屋敷地割を示す

0　100m

図２　県立彦根東高等学校内　調査地詳細図

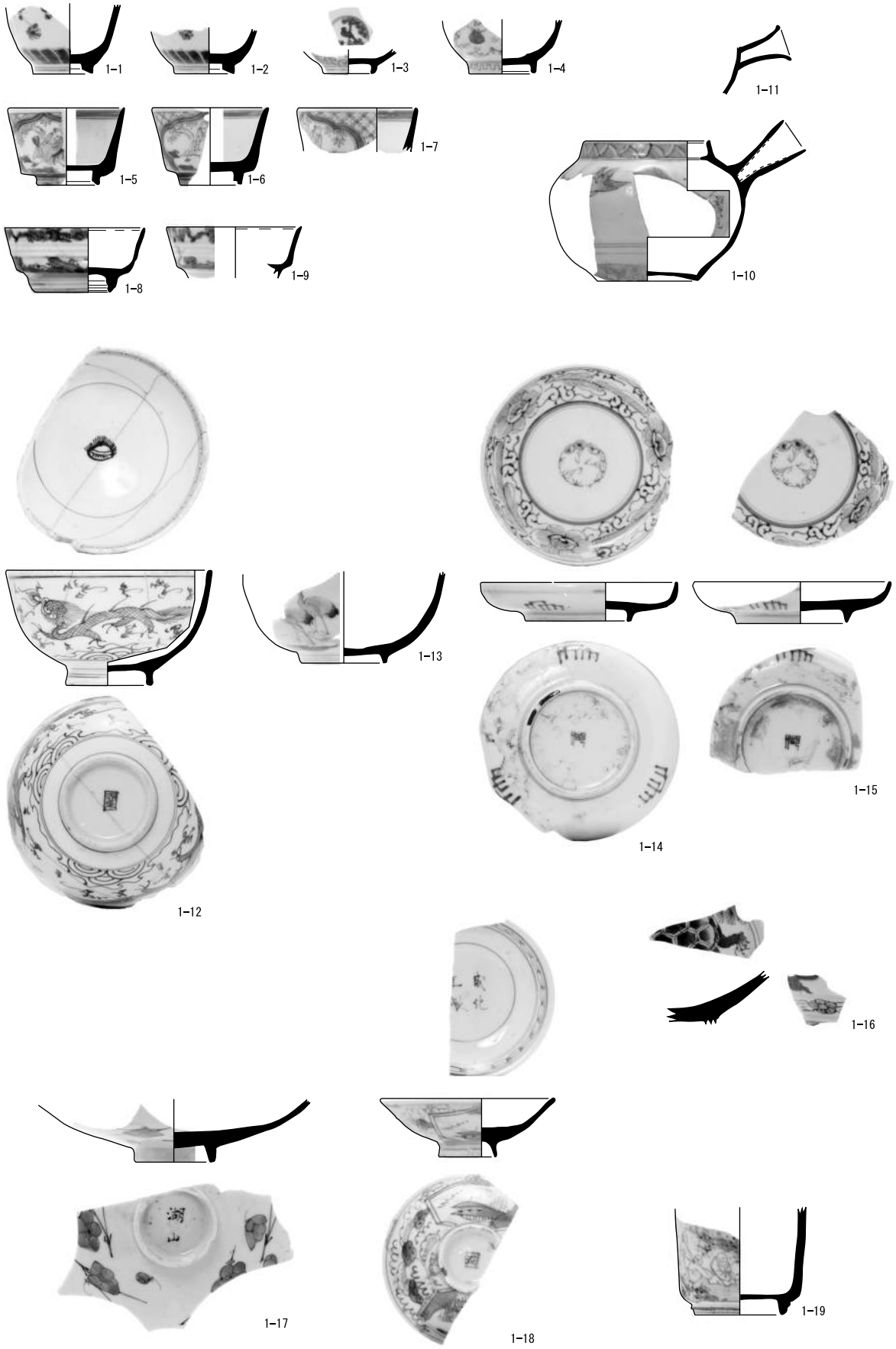


図３　遺物実測図（１）（Ｓ＝1/3）

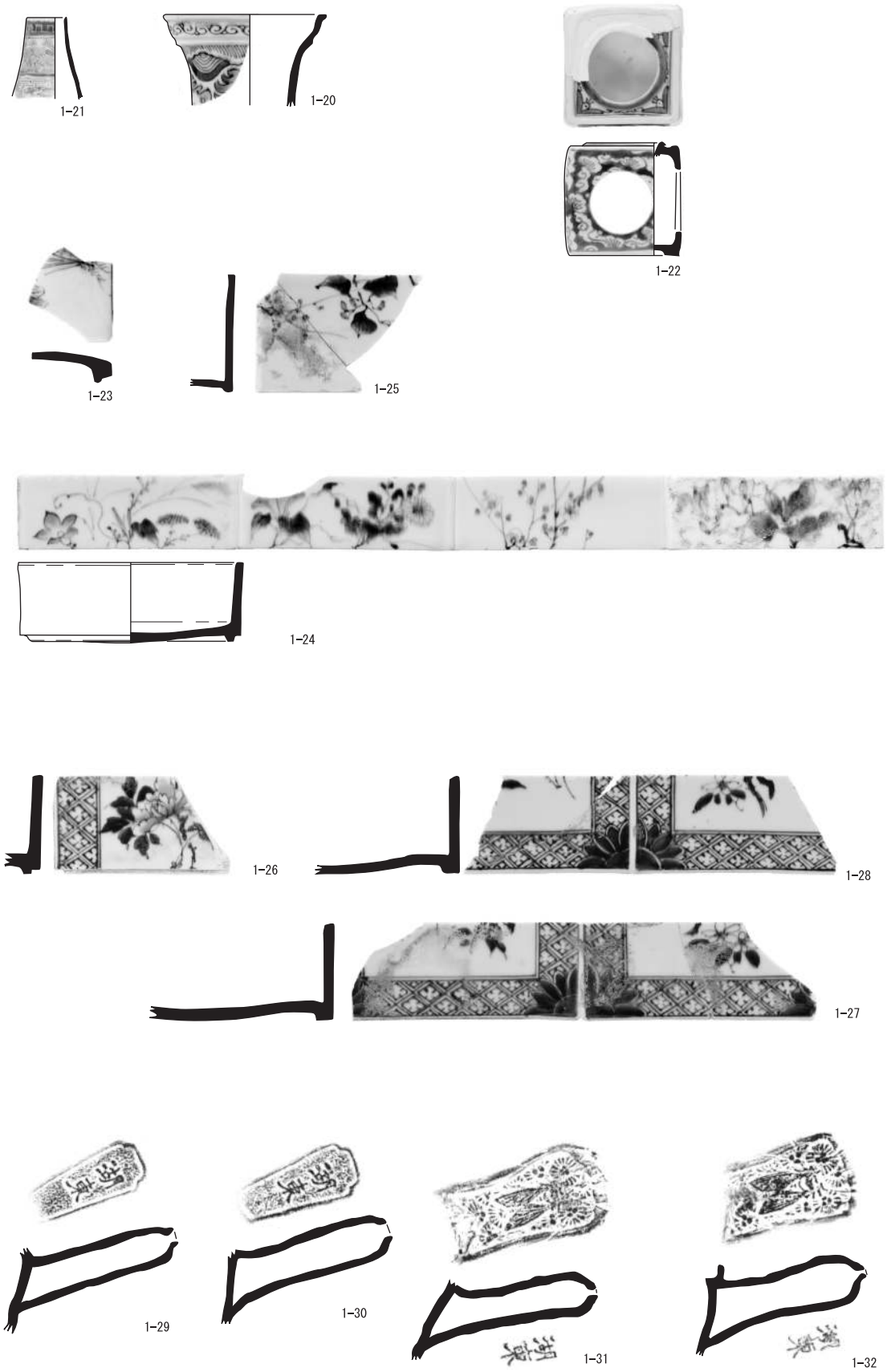


図４　遺物実測図（２）（Ｓ＝1/3）

図５　遺物実測図（３）（Ｓ＝1/3）

図６　印銘詳細（１）

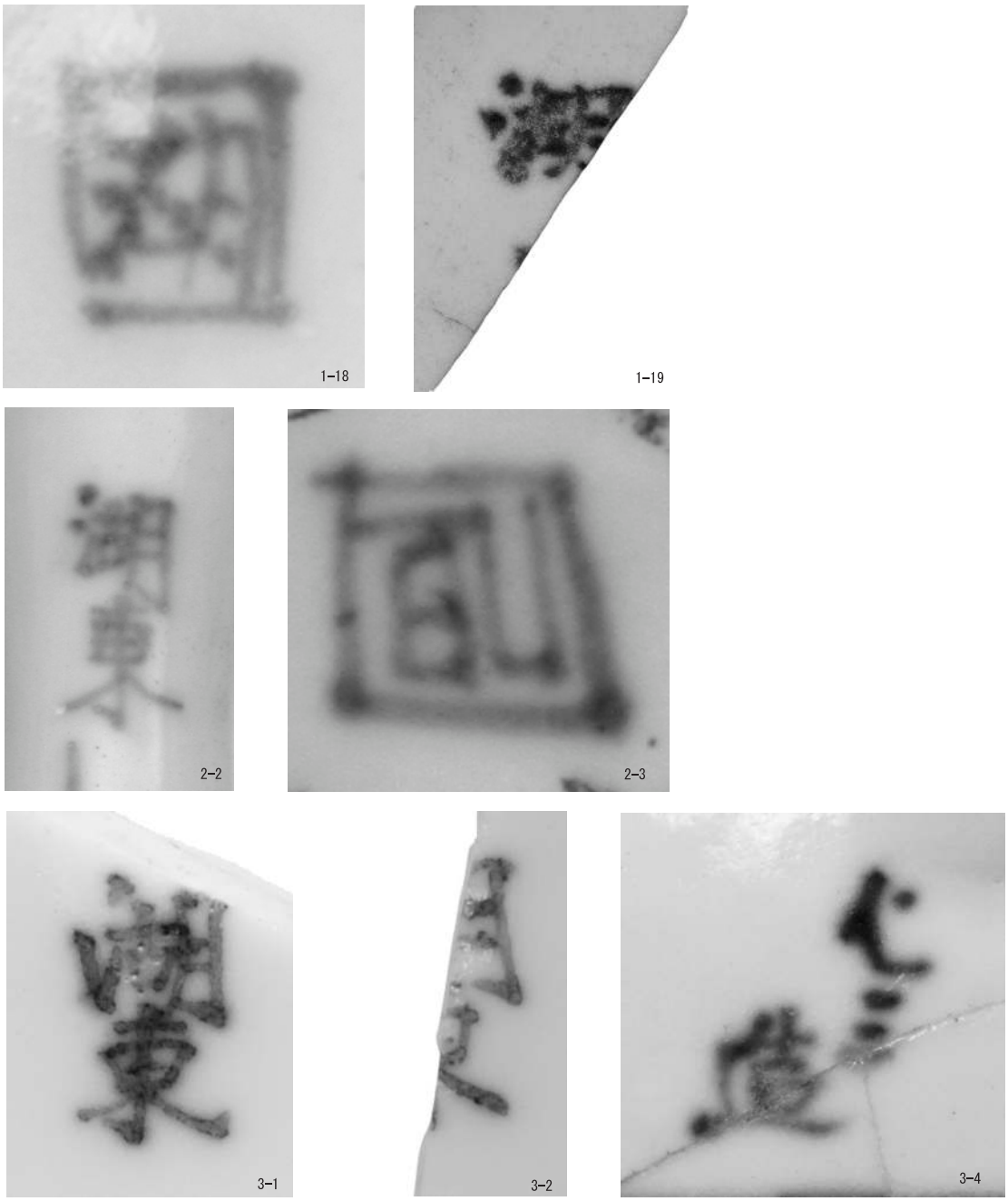


図７　印銘詳細（２）

出土遺跡名	図	遺物番号	器種	素地	釉調	絵付	呉須	主な絵柄	銘	備考
県立彦根東高等学校内	3	1－1	煎茶碗	磁器	白	染付	青紫	梅・連弁文	高台内　二重角枠「湖東」	同一客
第1次調査	3	1－2	煎茶碗	磁器	白	染付	青紫	梅・連弁文		
	3	1－3	煎茶碗	磁器	白	染付	青	松・鳥	高台内「湖東」	
	3	1－4	煎茶碗	磁器	白	染付	青	崩し	高台内　一重角枠「湖□」	
	3	1－5	煎茶碗	磁器	白	赤絵金彩		人物		同一客
	3	1－6	煎茶碗	磁器	白	赤絵金彩		人物		
	3	1－7	煎茶碗	磁器	白	赤絵金彩		人物		
	3	1－8	煎茶碗	磁器	ほのかに青	染付	強い青	松	高台内　二重角枠「湖東」	同一客
	3	1－9	煎茶碗	磁器	ほのかに青	染付	強い青	松		
	3	1－10	急須　本体	磁器	ほのかに青	染付	青	梅・鳥	胴部「湖東□」	
	3	1－11	急須　把手	磁器	ほのかに青	染付	青		把手「湖東」	
	3	1－12	飯茶碗	磁器	白	染付	青	龍	高台内　一重角枠「湖東」	
	3	1－13	飯茶碗	磁器	ほのかに青	染付	青	鶴	高台内「湖□」	
	3	1－14	皿	磁器	ほのかに青	染付	青	花唐草	高台内「湖」	同一客
	3	1－15	皿	磁器	ほのかに青	染付	青	花唐草	高台内「湖」	
	3	1－16	皿	磁器	ほのかに青	染付	青紫	花唐草　亀・松		
	3	1－17	蓋	磁器	ほのかに青	染付	青	梅	高台内「湖山」	
	3	1－18	盃	磁器	ほのかに青	染付	青		高台内　一重角枠「湖」　見込み「成化年製」銘	
	3	1－19	湯呑	磁器	白	染付	青紫	人物	高台内「湖□」	
	4	1－20	壷	磁器	ほのかに青	染付	青紫	雷文		
	4	1－21		磁器	白	赤絵金彩		木		
	4	1－22	盃　台	磁器	ほのかに青	染付	強い青			
	4	1－23	段重　蓋	磁器	ほのかに青	染付	青	梅・草花		同一客
	4	1－24	段重	磁器	ほのかに青	染付	青	梅・草花		
	4	1－25	段重	磁器	ほのかに青	染付	青	梅・草花		
	4	1－26	段重	磁器	ほのかに青	染付	強い青	花木・四方襷		同一客
	4	1－27	段重	磁器	ほのかに青	染付	強い青	花木・四方襷		
	4	1－28	段重	磁器	ほのかに青	染付	強い青	花木・四方襷		
	4	1－29	行平鍋　把手	陶器					把手「湖東」	鉄釉
	4	1－30	行平鍋　把手	陶器					把手「湖東」	鉄釉
	4	1－31	行平鍋　把手	陶器				蝉・菊	把手「湖東」	鉄釉
	4	1－32	行平鍋　把手	陶器				蝉・菊	把手「湖東」	鉄釉
表御殿跡	5	2－1	急須　蓋	磁器	白	染付	強い青	桜		螺旋状突起
	5	2－2	急須　本体	磁器	白	染付	強い青	菊	把手「湖東」	螺旋状突起
	5	2－3	飯茶碗　蓋	磁器	やや乳白色	染付	青紫	草花	蓋　一重角枠　銘有	
	5	2－4	飯茶碗　碗	磁器	やや乳白色	染付	青紫	草花		
	5	2－5	飯茶碗　蓋	磁器	白	染付	青	梅		螺旋状突起
	5	2－6	徳利	磁器	やや乳白色	染付	青	鶴		
県立彦根東学校内	5	3－1	煎茶碗	磁器	ほのかに青	染付	強い青	唐人物	高台内「湖東」	同一客
第3次調査	5	3－2	煎茶碗	磁器	ほのかに青	染付	強い青	唐人物	高台内「□東」	
	5	3－3	急須　蓋	磁器	ほのかに青	染付	強い青	梅		螺旋状突起
	5	3－4	急須　本体	磁器	ほのかに青	染付	強い青	草花	胴部「七(仁？)三造」	螺旋状突起
	5	3－5	急須　本体	磁器	黄含む白	色絵		松・人物		

※印銘はすべて染付

表１　湖東焼　掲載資料一覧

編集後記

前号の紀要より表紙デザインの刷新をはかりました。書架に並ぶことを想定し、各号ごとにテーマカラーを定めて発刊を重ねていきたいと思います。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っております。

（編集担当　M.N.）

平成20年（2008年）３月

紀　要　第21号

編集・発行　財団法人滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732−2
Tel.077−548−9780（代）
http://www.shiga-bunkazai.jp/
E-mail:mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本　三星商事印刷株式会社